



いよいよスタート 東大「福山研」!

ふく やま とおる
福山 透

東京大学大学院薬学系研究科

日本に帰国した一番の理由

1994年の暮れに東大薬学部の柴崎さんから連絡があり、「日本に帰る気がほんの少しでもあるなら、これが最後のチャンスだよ」と、東大薬学部の教授選挙に誘われた。さて、これは一大事である。それまでも何度かアメリカの大学から移らないか、という話はあったが、いつも「Thank you, but no, thank you.」と断っていた。家内や子どもたちの友人はヒューストンにしかいないので、他所に移るとなるとゼロからの再出発でたいへんだからだ。まあ、70歳くらいまではライス大学で研究してなどと、日本に帰ることを少しも考えていなかった私は、ここではじめて真剣に考えはじめた。そして結局、家族の反対を無視して教授選挙にでることを決めた。

「なぜ帰国したの?」とよく尋ねられるが、一番の理由は「私は根っからの日本人」に尽きると思う。22年もアメリカで暮らしたが、背中にはいつも日の丸を背負っていた。自分の家でも何か借家住まいのように思えたのは異邦人としての意識が抜けないからだ。

日米で異なる教授採用

教授を採用するのにも、日本とアメリカでは大きな違いがある。アメリカでは associate professor から full professor に内部昇格させる場合、審査はあるが対抗馬はいない。これ



Broadway Street にあるポストドク時代のアパート
左端の2階（実際は1階）が私たちの部屋だった。

は日本のような講座制ではないからだ。他大学から有力な教授を引き抜く場合、教授会でコンセンサスを得たあとに、大学を訪問してもらって研究環境や居住環境を見てもらい、給料や大学からのサポート額などを提示する。条件の折り合いがつき、相手がOKといえれば一件落着である。日本の大学では公募、非公募にかかわらず複数の教授候補のなかから教授会の投票で選任される。大学が独立法人化された今後はともかく、国立大学時代にはアメリカのように教授候補が諸条件を大学と交渉することはなかったと思う。

1995年の3月末に当時薬学部長だった故古賀憲司先生から私が選出されたという電話をいただいた。古賀先生は後日、スタンフォードの Barry Trost 先生に「Tohru に一体いくら払ったんだい?」と聞かれたと、笑っておられた。日本に帰ることをライス大学の化学科長 (Bob Curl; ノーベル化学賞受賞者) に報告してから大騒ぎが始まった。Bob にだけは「もし選ばれたら帰国するので交渉の余地はない」と1月に伝えていたのだが、どのように待遇を改善すれば思いとどまるのか要求をだしてほしいと頼まれた。私は同僚たちに「ライスが嫌なのではなく、母国に帰る決心をしただけだよ」といつて納得してもらった。

8月の帰国前には化学科の仲間たちが心のこもった盛大なパーティーを開いてくれて、「日本が嫌になったらいつでも戻ってこいよ!」といつてくれた。つくづく、よい同僚に恵まれていたと思う。

帰国前に思い出のケンブリッジへ

帰国する前に、私たち夫婦がアメリカ生活を始めた原点の地を子どもたちに見せようと、一家でケンブリッジを訪れた。ハーバードのキャンパスや外観がほぼ昔のままのアパート、Three Aces という美味しいピザ屋など、懐かしい風景を見ながら Charles 川にかかる Anderson 橋にやって来た。ここはじめて夫婦ゲンカをしたところで、今でもどちらに非があるのか疑問である。中学時代、家内は軟式テニスの部員

で、片や私は朝、昼、放課後と卓球に狂っていた。ハーバードのテニスコートで彼女にテニスを習ったのだが、しばらくすると“確かに”私のほうがうまくなったと思った。はつきりいってドングリの背比べなのだが、私のほうがうまくなったといい張ると、突然家内は黙りこくって速足になり、私はオロオロとあとを追いかける…という情けない羽目に、そんな他愛ない話を子どもたちにしながら散策を楽しんだ。その日の夜は岸さん宅でご馳走していただき、ケンブリッジの思い出をたくさん胸のなかに収めることができた。

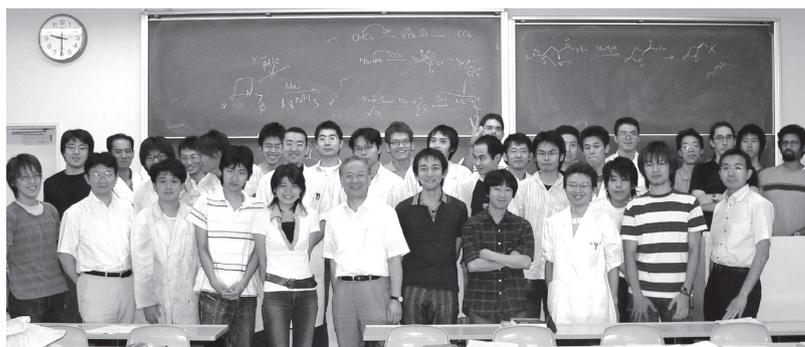
いよいよスタート東大「福山研」

1995年8月16日付けで東大薬学部の教授として赴任したが、新設講座なので研究室員は誰もおらず、ペンシルバニア大学のAmos Smith研でポスドクをしていた徳山英利さんが助手として合流したのが12月1日。やることもあまりなかったもので、全合成の本を使って徳山さんに個人教授をしていた。サントリー生有研の研究者だった菅敏幸さん(現静岡県立大薬学部教授)を面接して翌年4月1日付けで2人目の助手として採用。徳山さんがデザインした新実験室の工事が5月上旬までかかったので、4月に入ってきた4年生5人、博士課程1年生1人、研究生1人は、朝から晩まで私が毎日集中講義をして有機化学の基本をたたき込んだ。ライス大学のときもそうだったが、最初の学生たちの教育・訓練は、その後の研究室のレベルに直接かかわるだけにとくに重要である。

ところで、以前から知ってはいたものの日本の学生の境遇を目の当たりにして胸が痛んだ。アメリカの理科系大学院生には、1年目は学部学生実験のTAや試験の採点、学生の個人指導などで大学から、そして2年目以降は指導教授の研究費から給料が支給される。その額は多くないが、親から仕送りを受けなくてもなんとか生活できるし、あとで返還する必要もない。日本でも、学術振興会の特別研究員になれば博士課程の学生も経済的に自立できるが、残念ながら一握りの学生しかその恩恵を受けられない。

講義でもかわいそうな日本の学生

大学の講義でも日米には大きな違いがある。たとえばアメリカでは、私が担当していた「上級有機化学」の場合、月、水、金と50分ずつ教えていて、3回くらい中間試験をし、



全員ではないが福山研のグループ写真(2005年8月)

最終試験を期末に行っていた。また、高校時代に「Advanced Placement Program」で単位(AP credit)を取っておけば、大学前半で習う同様の科目は履修が免除された。できる学生はその代わりに学部上級や大学院の講義科目を履修し、もちろんそれらは卒業に必要な単位として数えられた。そして、大学院は他所に行ってさらに新しいことを学んでいくというのが典型的なコースである。日本の大学では「選択科目」といながら選択の余地はほとんどなく、優秀な学部学生が大学院の講義に出席して単位を取ることも事実上不可能である。この硬直化した教育制度は徐々に変わっていくと思うが、「飛び級」などは話題性があっても抜本的な解決策ではない。

とはいえ、文句をいっても始まらないので、とりえず自分の研究室の学生だけでもなんとかかせねばと、有機反応機構をかなり徹底的にたたき込んできた。本誌4月号で予告したとおり、有機反応機構の面白さを多くの方に体得してもらうために、『演習で学ぶ有機反応機構——大学院入試から最先端まで』(有機合成化学協会編、化学同人)を刊行した。私の研究室の全員が一丸となって生み出した記念すべき演習書であり、有機反応に興味のある方はぜひ挑戦していただきたい。

日本に帰ってきて、よかった!

「日本に帰ってきてよかった?」と、聞かれれば、以前はのりくりと答えていたものだが、今では素直に「よかった!」と答えられる。忙しさにかまけて現場を離れつつあるのが寂しいし心苦しいが、「日本の若者を育ててみたい」という願いは叶い、気持ちのよい青年たちに囲まれて幸せな日々を送っている。

この連載を終えるにあたり、何をいいたすかわからないような私をうまくコントロールし、タイトル、小見出しを考えながらスッキリと2頁に収まるようにしていただいた、化学同人編集部の方々に心から感謝したい。